

「次世代リポジトリ」のヴィジョン

林, 豊
九州大学附属図書館eリソースサービス室リポジトリ係

<https://hdl.handle.net/2324/1917882>

出版情報 : The Journal of Information Science and Technology Association. 68 (5), pp.258-259, 2018-05-01. Information Science and Technology Association Japan

バージョン :

権利関係 :

「次世代リポジトリ」のヴィジョン

林 豊*

キーワード：機関リポジトリ，グリーンオープンアクセス，学術コミュニケーション，COAR（オープンアクセスリポジトリ連合），次世代リポジトリ

1. はじめに

本連載を共に担う佐藤翔さん（同志社大学）や池内有為さん（筑波大学）とは違って、筆者は大学図書館で機関リポジトリ（IR）を担当する一介の図書館職員である。筆者のターンでは、実務者という立ち位置から、“現場”での実感も込めつつ、オープンサイエンスの“いま”について思うところを書いていきたい。

2. 機関リポジトリ

オープンサイエンスはオープンアクセス（OA）とオープンデータという概念を含むものである、というなんの定義にもなっていない定義がなされることがある。そのうちOAについては、グリーンOA（＝IRやサブジェクトリポジトリによる公開）とゴールドOA（＝OAジャーナルによる公開）の2つがあると整理される。

歴史を乱暴に振り返れば、1990年代頃からのジャーナル価格高騰（シリアルズクライシス）→OA運動の起こり→商業出版社がゴールドOAというビジネスモデルを確立し始め→……という流れになるだろうか。近年は、グリーンOAではサブジェクトリポジトリが大ブームで、フリッピング（購読誌からOAジャーナルへの転換）やオフセット契約（購読誌の契約額にAPCを含める）といったゴールドOA寄りの話題もホットである。平成が終わりを迎えようとするいまでも、IRによるグリーンOAは活発とは言えず、電子ジャーナル問題の解決には寄与していない。正直、円高のほうが期待されている。

だから日本のIRには存在意義がない、と言いたいわけではない。従来は紙でしか流通していなかった学内紀要等の電子化、CiNiiとのシステム連携、学位規則改正（2013年度）による博士論文のOA原則義務化への対応、IRコンテンツへのJaLC DOIの付与開始など、その功績は大きい。IRにメリットを感じ、担当者が驚くくらいに多数の研究成

果を登録してくださる研究者も、多くはないが存在する。一方で、リポジトリコミュニティの内外から「紀要なんて」という声が囁かれることもある。やはり査読済み学術雑誌論文という“華”を公開してこそグリーンOAだというのだ。かくして、IR担当者は自信を失いがちである。

3. グリーンOAのつらさ

IR担当者のルーティンはこの10年以上変わらず、(1) 著者最終稿（査読が終了し出版社にアクセプトされた著者原稿）の入手、(2) 出版社の著作権ポリシーのチェック（公開可能な版かどうか、エンバーゴ期間の有無）、(3) メタデータの作成、から成る。(2)もそれなりに面倒ではあるのだが、本質的にツライのは(1)である。多くの出版社はビジネスモデルに影響しない範囲で、6か月や12か月といったエンバーゴ期間を設けた上、著者最終稿という“不完全”な版の公開のみを許可している。この著者最終稿は、IR担当者としては著者から提供してもらおう以外に入手する方法がないのだが、（機関でOA方針を策定していても）座して待つだけで提供してくれる研究者は少数派である。一部の大学で行われているように、新着論文をデータベースで検索し、著者にメールで著者最終稿の提供を依頼するという方法が結局は効果的なのかもしれない。

そもそも、どうしてこんなことになってしまっているのかと言えば、研究者が論文の著作権を出版社に譲渡しているからであろう。書き手としての研究者は出版社に著作権を譲渡し、担い手としての研究者はジャーナルの品質の根幹をなす査読という価値を無償で提供し、読み手としての研究者は多額のジャーナル購読費の学内調整に追われる。商業出版社は学術研究のインフラを共に支える重要なパートナーではあるが、学術コミュニケーションを掌握しすぎてしまっているきらいがある。このアンコントロールな状態を解消できるのは、学術コミュニケーションの主役たる研究者以外にはいないと思うのだが（そう認識した研究者はボイコットを起こしたりする）、研究者自身も研究評価という縄に縛られて身動きが取りづらいつらいのかもしれない。

この現実を甘受しながら、商業出版社の許容範囲内でグリーンOAを続けるのであれば、前述のしんどさと付き合いつつ、少しずつでも論文に対するアクセシビリティを向

*はやし ゆたか 九州大学附属図書館 eリソースサービス室
リポジトリ係

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6丁目 10番 1号

E-mail: hayashi.yutaka.927@m.kyushu-u.ac.jp

(原稿受領 2018.3.12)

上させていくことが IR の使命になる。後手に回っていることは否めないが、その先に明るい未来が待っているのなら……。

4. 「次世代リポジトリ」の挑戦

世界中のリポジトリが協働することで、この隘路をなんとか抜け出したい。学術コミュニケーションをいま一度この手に取り戻したい。しかし、現在のリポジトリは出版された研究成果の著者最終稿を受動的に収集するだけで、既存のシステムを維持しているにすぎない。——COAR(オープンアクセスリポジトリ連合)の「次世代リポジトリ(Next Generation Repositories: NGR)」という構想は、このような問題意識を背景にしている。

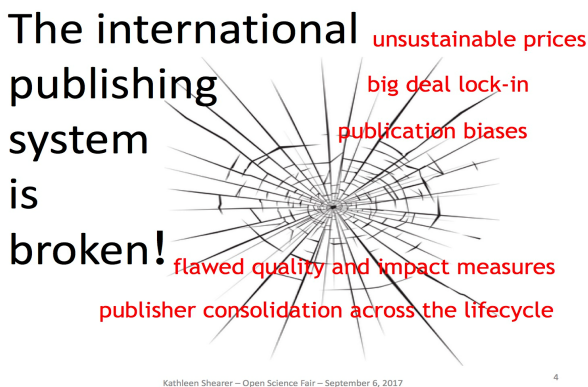


図1 現在の出版システムに対する批判¹⁾

世界規模のリポジトリコンソーシアムである COAR が NGR の WG を立ち上げたのは、2016年4月のことである(日本からも国立情報学研究所の山地一禎教授が参加している)。2018年2月開設のウェブサイト²⁾には、WGの成果³⁾として、想定されるユーザ(人間、機械)の行動、リポジトリシステムに求められる振る舞い、実装に必要な要素技術が整理されている。下図の通り、NGRの構想は野心に満ち、実現には従来よりも高度な Web 技術を伴うため、技術者サイドの興味を引く。

ただし、技術面ばかりに注目してははその本質を見失う。筆者の理解では、NGRのヴィジョンは「世界中に分散するリポジトリを高度に連携させることで、学術コミュニケーションの基盤(global knowledge commons)を構築し、その基盤上で論文に留まらない多種多様なコンテンツを活用した多角的なサービスを展開させ、学術コミュニティで協同運用するオープンな学術コミュニケーションシ

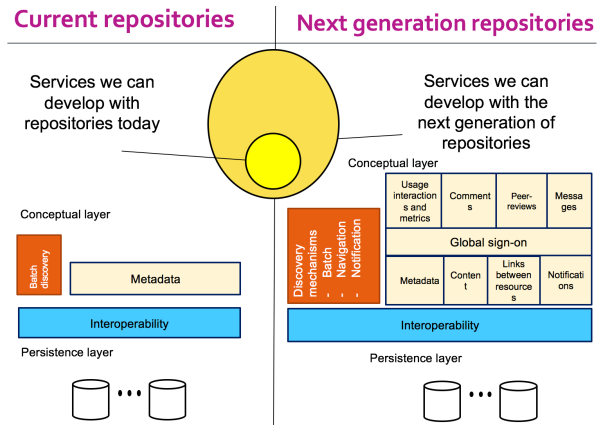


図2 現在のリポジトリと NGR の比較⁴⁾

ステムを実現する」ものだ。強調すべきは、特定のプレイヤーへの一極集中に対する反省に根ざした強烈的な分散指向である(それに伴い Web 的な技術・考え方の採用が必然となる)。

NGR で想定されるリポジトリの姿は、従来のように研究成果出版後に機能する受動的なものではなく、積極的に“出版”を担っていくプロアクティブな存在であるようだ。このように立ち位置を大きく変えることで、コンテンツの収集という難問を解決しようとしているように見える。しかし、NGRのヴィジョンが研究者の共感を得るかどうか、研究者たちの“社交(ソーシャル)”=学術コミュニケーションを支えるエコシステムを構築できるかどうか、課題山積である。そこでキーとなってくるのは、「査読」や「評価」というレイヤーだろうと考えている。

註・参考文献

- 1) Shearer, Kathleen: Next Generation Repositories: Moving from the “Fringe” to the Foundation of Scholarly Communication. 2017. <https://doi.org/10.5281/zenodo.886480> [accessed 2018-03-09]
- 2) COAR Next Generation Repositories: Vision and Objectives <http://ngr.coar-repositories.org/> [accessed 2018-03-09]
- 3) 林正治: 次世代リポジトリの機能要件および技術勧告. カレントアウェアネス-E. 2018, No.344. <http://current.ndl.go.jp/e2011> [accessed 2018-03-22]
- 4) Next Generation Repositories: Behaviours and Technical Recommendations of the COAR Next Generation Repositories Working Group. 2017. <https://www.coar-repositories.org/files/NGR-Final-Formatted-Report-cc.pdf> [accessed 2018-03-09]

Series: Current trend of open science. Vision of “Next Generation Repositories”. Yutaka HAYASHI (Digital Repository Section, Office for e-Resource Services, Kyushu University Library, 6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku | Fukuoka 812-8581, JAPAN)

Keywords: Institutional Repositories / Green Open Access / Scholarly Communications / COAR (Confederation of Open Access Repositories) / Next Generation Repositories